

i Labo デイゼル車を

水素エンジン車に改造

i Labo (東を語る)。

京都中央区)は、水素社会の早期実現を目的に、既存のディーゼルトラックを水素エンジントラックに改造する「水素化コンバーション技術」の開発を環境省から受託を進めている。来年4月には、水素燃料で走行する水素エンジン車で貨物を輸送し、安全性・実用性・経済性を確認する実証実験を行う予定だ。

同社の山根公高社長は50年前から水素エンジンを研究しており、およそ3年前に同社を設立。戦略企画本部長を務める小澤衛氏は、「70年代のオイルショックをきっかけに、エネルギー自給率の低さや化石燃料に頼っている状況を危惧し、水素エンジンの開発に着手した」と経緯

定。「エンジンを載せ替える技術があれば、自社でコンバーションいただける」「当社の『水素社会』のビジョンは、車両開発だけにとどまらない」と息巻くのは財務本部長を務める太田修裕氏。「車両のコンバージョンに加え、トラックターミナル内に設置するBtoB型水素ステーションをセットで提案する」という。「既存の水素ステーション

が、中型車以上がCO₂削減効果を発揮しやすい」とし「今後、10年以上乗るものをお勧めしている」という。

また、同社では、整備部門を持つ物流事業者や自動車整備事業者に対し、同技術のマニュアルや重要部品キットの提供、人材育成支援なども展開していく予

は街中にあり、乗用車向けが多い。現状では補助金があっても赤字になりがちだが、経済性の調査もあわせて行う」

来年4月の実証実験では、実際に荷物を積んだ水素トラックと移動型の水素ステーションを使用する予定。両氏は、「大型の水素トラックの実用化は2030年頃と言われているが、指を咥えて待っているのではなく、カーボンニュートラルな社会の早期実現に向けて貢献している」と熱く語った。(高橋頌子)



(提供写真)